

めいく五・七・五

活動場所：2年1組教室、学校敷地内各所

10月8日（木）9：20～10：25

提案者 笠井 悠

1 活動のねらい

感じたことや考えたことを五音・七音・五音の定型詩（以下、「五・七・五」）で表現したり、句を仲間と読み合ったりする活動を通して、表現したいことに合う言葉を選んだり、表現のよさをとらえたり、表現の工夫に触れたりしながら、短い言葉で表現する楽しみやよりよい表現をつくる。

2 活動設定の意図

子どもは日常生活において、感じたことや考えたことを身近な他者に話している。学校の活動においては、それを作文シートに書く行為を積み重ねている。

本活動で、子どもは、日常生活や学校の活動で感じたこと、考えたことを五・七・五で表現することを繰り返す。この五・七・五は、俳句と川柳を含む表現様式であり、「新俳句」とも呼ばれているものである。

五・七・五は、表現したいことを、定められた少ない音数の言葉で表現することに楽しさと難しさがある。子どもは、経験したことから題材を決めたり、表現したいことに合う言葉を選んだり、声に出しながら指を折って音数を確かめ、言葉のリズムを楽しんだり、様々な表現の工夫に触れたりしていく。

また、五・七・五には、それを生かした多様な遊びがある。子どもは、多様な遊びをしながら、言葉の続き方や表現のまとまりをとらえたり、言葉を通して仲間とかかわることの楽しみをつくったりしていく。

句を継続的に展示し、仲間と読み合うこともできる。五・七・五は短い言葉の表現であるため、つくられた場を共有していることが、表現の意図やよさをとらえることを促す。学校生活を共にする仲間の表現と自分の体験を結び付けて感想をもったり、仲間が選んだ言葉を手がかりにして想像をひろげたりする。自分の表現から仲間がもった感想を聞くこともある。それを通して、自分や仲間の表現のよさをとらえていく。

五・七・五という表現様式とかかわることを通して、子どもは、言葉を選んで表現することや仲間の表現を知ることの楽しみをつくり、自分のよりよい表現をつくっていくのである。

3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

○五・七・五を繰り返す

感じたことや考えたことを、五・七・五で表現する

ことを繰り返す。つくった句は、専用ノート『めいくノート』に書いていく。繰り返すことを通して、句を仲間を紹介したいという思いや様々な題材、場をつくりたいという思いが膨らんでいく。句を短冊に書いて展示したり、様々な場で五・七・五をつくったりする。句を読んでもらう楽しみやその場で感じ、考えたことを表現する楽しみをつくっていくとともに、言葉による表現の世界をひろげていく。

○五・七・五で多様な遊びをする

五・七・五を生かした多様な遊びをしていく。例えば、三人が上五、中七、下五をそれぞれ考え、組み合わせで一句をつくる「三人一句」。子どもは、楽しみながら言葉のつながりに気づくだろう。句の隠されている部分につくり手が選んだ言葉を推測する「かくれ言葉五・七・五」。子どもは、示された言葉から想像をひろげたり、句で表現しようとしていることを考えたりしていくだろう。「五・七・五しりとり」や「カルタ」もある。短い言葉で表現することや言葉を通して仲間とかかわることの楽しみをつくっていく。

○仲間の多様な表現に出会う

句を読んでもらいたい、仲間の句を読みたいという思いの膨らみに合わせて、句を紹介する活動やよさを感じた句を選び、そのよさを伝え合う「句会」を開く活動を設定する。子どもは、自分の句について仲間が感じたことや考えたことを聞く。また、仲間の表現に出会い、仲間が表現しようとしていることに共感したり、自分とは異なる言葉の選び方や続け方、そのよさをとらえたりしていく。よい表現をすることへの思いを膨らませ、自分のよりよい表現をつくっていく。

「めいく五・七・五」(全40M)

第1次 五・七・五に出会う(5M)

- ・教師の自己紹介五・七・五に出会う
- ・感じたことや考えたことを五・七・五で表現してみる
- ・つくった句を『めいくノート』に書く

第2次 五・七・五で表現する(40M)

- ・五・七・五の表現を繰り返し、『めいくノート』に書く
- ・つくった句を短冊に書き、展示する
- ・五・七・五を生かした多様な遊びをする
- ・五・七・五の表現の工夫を考える
- ・句を紹介し、よさを伝え合う句会「めいく会」をひらく(本時)
- ・句を投稿する。

第3次 五・七・五を振り返る(2M)

- ・つくってきた句や五・七・五という表現様式を振り返る

4 対象とかかわる子ども

子どもは、1学期初日に、教師の自己紹介五・七・五に出合った。五・七・五が音数であることとその数え方に気付いた。句をつくってみて、音数に合わせて言葉を選び、表現のまとまりをつくる難しさを感じるとともに、一つの句ができることの喜びを感じていた。

句がいくつかできてきたときに、『めいくノート』を手にした。句をたくさんつくり、書き記していくことの楽しさを感じていた。

思い思いの場や題材で句をつくることを繰り返すとともに、題材を決めて句をつくることに取り組んだ。紹介したい句を短冊に書き、展示した。短冊を立て終わると仲間の句を読んでいた。句を読んでもらうことや仲間の句を読むことの楽しさを感じていた。

自分の紹介したい句を展示したり、仲間の句を読み、よさを感じた句を伝え合ったりする中で、よさを感じる句に使われている技法「めいくわざ」に着目し、名付けた。擬音語を生かして句をつくる技法は「音めいく」、文字の表記を工夫する技法は「文字がえめいく」などがある。表現の工夫に着目してきている。

また、自分の句を紹介し、仲間の句のよさを伝え合うことを主とする句会「めいく会」を開いた。第1回「めいく会」で、その楽しさを感じていた。第2回「めいく会」を開き、よい句ができたことを感じたり、よい句をつくりたいという思いをもったりしている。

(3) 本時の展開 3 3M・3 4M/全 4 7M (6 5分)

5 本時の構想・展開

(1) 本時のねらい

第3回「めいく会」に向けて句をつくることを通して、題材について表現したいことに合う言葉を選んだり、つくってきた技法を生かしたりしながら、五・七・五のよりよい表現をつくる。

(2) 本時の構想

○ 第3回「めいく会」に向けて句をつくる

子どもは、これまでの「めいく会」で楽しさを感じていた。一方で、第2回「めいく会」で、よい句をつくるができなかったという思いをもった子どもがいる。第3回「めいく会」では、よい句を出したいという思いをこれまで以上にもつだろう。本時では、子どものさらに句をつくりたいという思いやよりよい句をつくりたいという思いを受けて、改めて、第3回「めいく会」に向けて句をつくる。言葉を選んだり、技法を生かしたりしながら、よりよい表現をつくっていく。

○ 前時に句をつくるときに工夫したことを共有する

子どもは、前時に、第3回「めいく会」に向けて句を、短い時間でつくった。その中で、言葉選びを工夫したり、技法を生かしたりした子どもがいるだろう。本時では、前時に句をつくるときに工夫したことを共有する。改めて、第3回「めいく会」に向けて句をつくりながら、表現したいことに合う言葉を選んだり、技法を生かしたりし、よりよい表現をつくっていく。

時間	番号；子どもの活動 ・；子どもの姿	○；教師の手立て
1 0	1 前時で句をつくる時に工夫したことを話す ・「めいくわざ」を使って句をつくるようにしたと話す。 ・「秋」という言葉を使わずに句をつくるようにしたと話す。	○前時やその後で、句をつくる時に工夫したことを話していた子どもに発言を促す。
3 5	2 第3回「めいく会」に向けて句をつくる ・題材「秋」について、表現したいことを感じたり、考えたりすることができる場所で、句をつくる。 ・表現したいことに合う言葉を選びながら句をつくる。 ・「めいくわざ」を生かして句をつくる。	○前時の終わりに、もっと句をつくりたいという思いをもった子どもが多くいたことを話す。 ○子どもと共に句をつくり、『めいくノート』に書く。
1 0	3 第3回「めいく会」に出す一句を選ぶ ・『めいくノート』を読み返し、題材「秋」について表現したいことが最も表現できている一句を、迷いながら選ぶ。 ・嬉しそうな表情や楽しみにするような表情で短冊に書く。	○第3回「めいく会」に出す一句を短冊に書く。
1 0	4 第3回「めいく会」に出した一句をつくる時に考えたことや選んだ理由を書く ・表現したいことをよく見たり、思い出したりしてつくったと書く。 ・表現したいことに合う言葉を選ぶことができたを書く。	○読んで感じたことを、子どもに伝える。

6 活動の振り返り

(1) 「いい句をつくりたい」という思い

10月7日「めいく五・七・五」で、第3回めいく会を始めた。その前日には、郁也さんが「そろそろめいく会がしたい」と話し、他にも、めいく会を開きたいという思いをもっている子どもがいることが伝わってきていた。第3回めいく会の題材は「秋」に決まった。「葉っぱが落ちるようになってきた」「葉っぱの色が変わり始めている」「朝と夜が寒くなってきた」「朝、布団から離れられなくなってきた」「晴れていたのに急に雨になることがよくある」「栗を公園で拾って、お姉ちゃんと『もう秋だね』と話した」と、秋を題材にしたい理由や、秋を感じた最近の出来事を話した。そして、早速、句をつくり始めた。

子どもは、句をつくらしているときや教室に戻った後に、つくりながら考えていたことを教師に語ってきた。恵美さんは教室に戻ってくるなり、「秋を使わないでつくるようにした」と話した。恵美さんは少し前から、題材のことばを入れずに句をつくることを試みていた。達哉さんは「色めいくを使った句ができた！」と嬉しそうに話し、大智さんは「いっぱいできたけど、そんなにいいのがなかった」と話した。「もっとつくりたい」「もう少し時間があると他にもいい句ができそう」という思いをもつ子どもが多かった。

(2) よりよい表現をつくるきっかけ

「もっといい句をつくりたい」という思いをもつ子どもが、よりよい表現をつくるきっかけになり得ることを知ったり、再確認したりして、改めて句をつくる活動にしたいと考えた。

本時の始めに、前時で句をつかったときに工夫したことを尋ねた。光さんは「秋のことを考えながら、イメージしながらつくった」と話し、葉と風を例に挙げた。題材について表現したいことを考えることは、句をつくる第一歩ともいえる、最も重要なことである。

圭さんは『秋』を入れないで、秋とわかるように句をつかった」と話した。前時の終わりに恵美さんが語ってきたように、題材のことばを入れずに句をつくるということである。それについて那菜さんは「秋って入れない方が難しいんだけど、秋ってことばを使わないで秋を表現した方が楽しい」と話した。一方で、郁也さんは「秋を入れた方がすぐに秋ということが分かる」と「秋」ということばを入れることのよさを話した。子どもは、これまで、題材のことばを入れた句を多くつくってきた。前時につくった句のほとんどにも「秋」が入っていた。確かに、題材のことばを入れることで、何についての句であるかが伝わりやすくなる。一方で、題材のことばを入れずに表現しようとす

ると、表現したいことについて想像をひろげたり、表現したいことを見つめ直したり、ことばを選んだりして、題材について表現したいことをより伝える句になることがある。その過程に楽しさを感じることは、句をつくることの醍醐味でもある。

那菜さんは「色めいくを使ってつくった」と話した。これまで、よさを感じる句に生かされている技法を「めいくわざ」と呼び、子どもと共に6つつくってきた。「色めいく」とは、色を表すことばを句に入れる技法である。那菜さんは「色めいくを使って、しかも秋を入れない句をつくっていくと、イメージできて楽しい」と話した。郁也さんは、「ぼくは、音めいくと言いかえめいく、ようすめいくと言いかえめいくを使った」と話し、それについて「ダブルめいくだね」と話す子どもがいて、一句の中にめいくわざを2つ使うことを「ダブルめいく」と名付けた。

これらの工夫を共有し、改めて句をつくった。

(3) 表現したいことに合うことば

尚人さんが表現したい「秋」は、ヒガンバナであった。数日前に学校に持ってきて、創造活動「スタンドでつくる」でつくった庭に植え、開いた花である。前時と本時でヒガンバナについて6句つくった。

- | | | |
|--------|---------|-------|
| ・ヒガンバナ | 秋のたいよう | まっ赤だよ |
| ・ヒガンバナ | 秋でいちばん | きれいかも |
| ・ヒガンバナ | まっかできれい | すごくねえ |
| ・ヒガンバナ | あきのたいよう | みたいだな |
| ・ヒガンバナ | あきでいちばん | すきな花 |
| ・ヒガンバナ | すごくまっかな | たいようだ |

尚人さんは、ヒガンバナが好きであることやその赤さを表現したかったのだろう。ことばの組み合わせを変えたり、色を表すことばを入れたりしていた。尚人さんは、これまで130句以上をつくってきた。お気に入りには、「木のはっぱ なつはみどりで あききいろ」「ミズナラだ あなにクワガタ いないかな」。植物や生物を詠み、色を表すことばを入れた句をつくることを好んできた。「秋」を題材とした句では、ヒガンバナを詠んだ句に加えて、「コスモスは 白とピンクで かがやくよ」「コスモスは かがやいている ほしみたい」のように、植物を詠み、色を表現しながら、下線部のような比喻表現もつくっていた。

圭さんは、秋の句の2句目に「やきいもを すごくほおばる おいしいよ」をつくった。その後、植物や気候についての句をつくるとともに、焼き芋を詠む句をつくり続けていった。他にも次の句をつくった。

- | | | |
|--------|---------|-------|
| ・やきいもは | あっちこっち | 口もえる |
| ・やきいもが | たくさんあるよ | ほおばるよ |
| ・やきいもは | ほかほかあつい | あたたまる |
| ・やきいもは | ぼくが大好き | ほかほかだ |
| ・やきいもは | おいしいついで | あたたまる |

- ・やきいもを すごくほおぼる ほかほかだ
- ・やきいもの 中のみあつい おいしいよ
- ・やきいもは おいしいですよ オススメだ
- ・やきいもを 自分で食べたら ほかほかだ
- ・やきいもは ほかほかだから 口もえる
- ・たくさんね やきいもたべる ほかほか
- ・やきいもは 秋のたべもの おいしいよ
- ・やきいもは いっぱいあるよ おいしいよ
- ・ほかほかの やきいもたべる おいしいよ
- ・ほかほかの やきいもたべる うますぎる
- ・やきいもは うますぎるんだ たべますよ
- ・やきいもは あっちっちっち あっうまい
- ・やきいもは ほかほかすぎて たまらない
- ・やきいもが いっぱいあるよ ほかほか

焼き芋の熱さやおいしさを表現したかったのだろう。圭さんは少し前に、一つの表現したいことについて、ことばを変えて6句つくっていた。本時ではさらに増え、また、ことばの順と組み合わせを多様に変え、表現したいことに合うことばを見つけていった。



郁也さんは、秋で表現したい様々なことの句をつかった。トンボをじっと見つめたり、空を眺めて「あの雲は、うろこ雲だっけ？」と教師に尋ねたりしながら句をつくっていた。

- ・赤とんぼ ゆうがたです にあういろ
- ・秋の雲 うろこ雲空 およいでる
- ・秋の風 ビュービューふいて せんぷうき
- ・秋の色 赤黄みどりを 木あらわす
- ・秋さむさ コオルコオルよ カチコチだ
- ・秋たべる 食よくすごい たべまくる
- ・秋の雨 いろいろ天気 それぞれだ
- ・読書秋 図書かん行って 本よむぞ
- ・秋の空 すぐ天気がね かわるぞよ

秋で表現したい様々なことを句にしながらか、比喩表現や擬音語・擬態語、表記の工夫を生かしていた。

(4) 最もよい表現の選択

教室に戻ってきた子どもは、満足そうな様子であり、「いい句ができた」と話していた。めいく会に出す一語を決めて短冊に書き、選んだ理由やその句をつくりながら考えたことを書くように伝えた。

尚人さんは「ヒガンバナ 秋のたいよう まっ赤だよ」を選び、「ダブルめいくで、ぼくはヒガンバナが

すきなので、えらびました。いい句をつくりたいとおもっていたら、おもいつきました。」と書いた。「いい句をつくりたい」という思いをもち、表現したいことと技法を生かしたことを併せて、つくった句のよさをとらえている。

圭さんは「やきいもはほかほかだから 口もえる」を選び、「ぼくはおもしろい句をつくりたがりやで、一番おもしろいとおもったのがこの句です。とくに口もえるのぶぶんです。あつすぎて口がもえちゃうみたいなので、ほかほかすぎてあつすぎて口の中がマグマじょうたいだ



から、口もえるということばをいれました。あともう一つ、やきいもは秋にたべるたべものなので、秋というのをいれなくてもいいので、秋をいれないほうが秋らしいのがいっぱい五七五の中にいれるので秋ってということばをぼくはだいたい入れないです。」と書いた。表現したいことをそれに合うことばで表現できたことを実感しているとともに、題材のことばを句に入れないことについてのとらえをつくっている。

郁也さんは「秋の雲 うろこ雲空 およいでる」を選び、「かん字がすごく合う気がしたからえらびました。空に、雲がういていて、そこでこの秋の雲の一句をかこうとおもって、先生に何雲かをきいて、この句をつくりました。」と書いた。表現したいことをもち、それを表すことばを知り、適切な表記を考えていた。

(5) よりよい表現をつくっていく

秋の句をつくりながら、ことばを選んだり、その順を入れ替えたり、多様な組み合わせを試したりする子どもの姿があった。子どもは、よい句をつくりたいという思いや題材について表現したいことをもちながら、それに合うことばを選んだり、それを表現できる技法を生かしたりして句をつくっていた。よりよい表現をつくらうとしている姿であったとらえている。

〈メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください〉

提案者連絡先 ykasai@juen.ac.jp (笠井悠)